

# 保育における「隠れたカリキュラム」の存在

三井真紀

Deciphering Early Childhood Care and Education in Terms of Hidden Curriculum

Maki MITSUI

〔要約〕本研究は、保育における「隠れたカリキュラム」の存在を読み解くことを目的とする。日本とフィンランドの保育現場における事例を通し、「隠れたカリキュラム」を巡る現状と課題を分析した。その結果、保育現場の隠れたカリキュラムは、保育者や保護者の乳幼児期のステレオタイプの関与だけでなく、子どもへの期待が関与していることが示唆された。また、保育者の「隠れたカリキュラム」は、フィンランドにも存在すること、しかしフィンランドの実践と比較したときに、日本では保育の中の多文化共生につながるチャンスや体験が損なわれている可能性が明確であった。保育における「隠れたカリキュラム」と向き合うためには、保育者養成校で多様な価値観に出会いながら学びを続けることが重要であり、その成果として自覚的な保育実践が可能になると考えられた。

キーワード：保育、隠れたカリキュラム、日本、フィンランド

## 1. 問題

乳幼児は、大人の秩序を再生産しながら生きている。したがって、保育に反映される子どもの生活世界を観察することは、社会の構造・社会の秩序を明らかにする一つの手段である。保育所や幼稚園、こども園などの現場（以下、保育現場）において、乳幼児の多くは、初めて家族以外の集団の中で暮らし、社会の人々の「暮らし方」を学んでいく。保育における「暮らし方」とは、保育現場での正規のカリキュラムに則ったものだけではない。政策として掲げるガイドラインを基準として明示された計画とは別に、子どもの「暮らし方」に大きな影響を及ぼすものが「隠れたカリキュラム」の存在である。「隠れたカリキュラム」とは、1968年に教育学者のフィリップ・W・ジャクソン（Philip W. Jackson）が次のように表現した言葉が最初であるといわれる（Jackson, 1990）。

As implied in the title of this chapter, the crowds, the praise, and the power that combine to give a distinctive flavor to classroom life collectively form a hidden curriculum which each student (and teacher) must master if he is to make his way satisfactorily through the

school. The demands created by these features of classroom life may be contrasted with the academic demands – the "official" curriculum, so to speak – to which educators traditionally have paid the most attention. As might be expected, the two curriculums are related to each other in several important ways.

「この章のタイトルで示されているように、群衆、賞賛、そして教室での独特な空気は、集合的に隠れたカリキュラムを形成し、各生徒（および教師）が、学校生活を満足して過ごすために習得必須のものとされます。従来、教育者が最も重要視した公式のアカデミックなカリキュラムとは対照的かもしれませんが、おわかりのように、2つのカリキュラムは、いくつかの重要な方向で互いに関連しています」（下線および訳は筆者による）

つまり、「隠れたカリキュラム」とは、学びの場の公式なカリキュラムの中にはない、知識や行動の様式、意識などが、意図しないままに、教師、子どもらが作り出したり、空間から伝達されたりしていく様相を呼ぶ。保育現場において「隠れた

カリキュラム」が存在していることは、多くの保育者が経験的に理解し、それらは、社会や家庭と接点を持ちながら、保育現場で強化されていることも研究によって明らかにされている（青野，2008，藤田，2002）。日本の保育学領域における「隠れたカリキュラム」に関連する調査は、1990年代から蓄積がある。乳幼児期からの「ジェンダー・バイアス」の実態の研究（青野，2008）や、ジェンダー構築を紐解いた研究（青野，2008，藤田，2002）など、いずれも優れた報告である。一方、保育学領域の中で、ジェンダー以外に着目した報告は予想以上に少ない。「幼稚園教育要領」の分析に焦点をあてた鳥越（2014）の研究のほかは、他の研究分野に任されている印象である。報告者は、過去にフィンランドの保育現場の観察を通して、保育・幼児教育における「隠れたカリキュラム」の存在について着目している。とりわけ、価値・規範・信念や態度に関連した「隠れたカリキュラム」が、保育空間の作られ方や、多文化共生社会の保育に重要であることを示唆してきた（三井，2016，三井，2019）。本稿では、保育における「隠れたカリキュラム」の存在について確認するとともに、どのように機能しているのかを再考する。

## 2. 目的と方法

本研究は、保育における「隠れたカリキュラム」の存在を、保育現場の事例を通して読み解くことを目的とする。特に、日本における保育の中の「隠れたカリキュラム」の現状を明らかにするため、20XX年に実施したA大学における講義の内容を検討することを中心とし、フィンランドの事例についても再考していく。

## 3. 倫理的配慮

A大学における研究にかかる手続きは、文部科学省科学研究費（課題番号：21K02322）基盤研究（C）に申請済みの研究計画書における「倫理的配慮」の項目に沿って実施した。A大学のBクラスの所属長に事前承認を得て、協力者である受講生には、全3回にわたる一連の講義の初回に研究協力を依頼した。受講生には、口頭で、今回の協力内容は、研究以外の目的には使用しないこ

と、研究の中で個人は特定されないこと、協力は自由であることを説明した。そのうえで、初回コメント用紙の自由記述欄に、同意できない場合には「協力不可」の意思表示を依頼し、特に記載のない場合には、協力に同意することになると説明をした。その際、同意の有無が、授業評価へ影響することは一切ない旨を十分に説明している。A大学の本調査の記録は、同意を得られた28名の記述としている。なお、フィンランドにおけるインタビュー調査は、文部科学省科学研究費（課題番号：16K04640）（2016～2019年）の調査ガイドラインに準じて実施されたものである。

## 4. 日本の保育実践における隠れたカリキュラム

20XX年度の対面講義において「保育・幼児教育現場のカリキュラム」の講義を実施した。該当クラスの受講生は、保育を専門にしており、既に保育実習、幼稚園実習等を複数回終えていた。授業では「隠れたカリキュラム」について基礎的事項を確認したのち「保育現場における隠れたカリキュラム」について具体的に考えることをグループ・ディスカッションとして指示した。学生は、3人一組で積極的に対話を始めるが、5分ほどすると首を傾げ、互いの顔を見ながら考えこむ様子が見られた。また、メモをとる手が止まる様子もみられた。15分間のディスカッション後に、グループごとの発表の時間を設けた。発表では次のような「隠れたカリキュラム」による保育の現状や、子どもが獲得している学びの例が、50例ほど出された。表1は、言い回しの間違い以外をできるだけそのまま整理したものである（カテゴリー分類は報告者による）。

発表時、ほとんどのグループから、「保育現場に存在する事例をあげるのが、思いのほか難しかった」「なかなか事例が出てこなかった」という感想が述べられた。その上で「今、しっかり考えておかなければ、現場で時間をとって考えることはできないと思った」等の意見交換に発展していた。中でも「この内容は、ほとんどが大人の考える‘よい子’に繋がっているのではないか」「色々な子どもがいるはずなのに、‘こんな子がよい子です’というメッセージを保育者が伝えているのではないだろうか」「なぜ、そうしなければいけ

表 1. 「隠れたカリキュラム」に影響を受けていると考えられる保育内容など

<p>&lt;遊びに関すること&gt;          天気の良い日は、外で遊ばなければいけないこと          遊ぶときには、友達と複数で遊ぶほうがよいこと          友達と楽しく仲良く遊ぶこと          時間になったら、片づけをしなければいけないこと          男の子はライダー系、女の子は人形で遊ぶのが普通であること</p>
<p>&lt;生活に関すること&gt;          挨拶は、しなければいけないこと          挨拶は、できるだけ大きな声で元気にするほうがよいこと          泣かない子が強いこと（泣く子は弱いからできるだけ我慢すべきだということ）          姿勢は、正しく座るべきだということ          園長先生が来たら、背筋を伸ばして話をきくこと          昼寝をしなければいけないこと（眠れない子がダメであること）          「ごめんなさい」がすぐに言えるほうがよいということ          健康でいることは、大事だということ          発表すること（挙手をする）は、偉いということ          力仕事は、男の子や男の先生が得意であること          男の子は、髪が短いこと          誕生日には、お祝いをする          発表した人には、拍手をすること          病気以外の理由で、保育園を休んではいけないこと          制作は、上手にできないといけないこと</p>
<p>&lt;年齢に関すること&gt;          年上の子は、年下の子に優しくすること          年下の子は、できなくてあたりまえであること          「もうすぐ年長だから」「もう年長だから」を動機にしてがんばること          兄弟、姉妹がいる場合には、上の子がしっかりすべきということ</p>
<p>&lt;食事に関すること&gt;          好き嫌いは、ないほうがよいこと          食べるのは、早いほうがよいこと          たくさん食べられる子のほうが、すごいこと          デザートは、全部食事を終えてから食べること（最後に食べなければいけないこと）</p>
<p>&lt;保育者に関すること&gt;          保育者のいうことは、正しいということ          保育者の髪の色は、黒か茶色であること          保育者が来たら、子どもは静かにしなければいけないこと          保育者の質問には、間違っではいけないこと          保育者からの挨拶や質問には、大きな声で答えなければいけないこと          保育者は、みんなピアノが弾けるということ</p>

ないのか、科学的な根拠がないものも多いのに、決めつけていることが怖くなった」などの意見に、同意する声が集まった。

- 次に、授業終了時のコメントを一部抜粋する。
- ・自分が無意識に実践していると思うと（それがよい影響を与えるものであっても）怖いと感じた
  - ・気づかないのに、伝わっていることに驚いた
  - ・どこの実習に行っても、カリキュラムという言葉は出てきたが、私たち自身がカリキュラムを体現しているのだと実感した
  - ・身近な場面で、隠れたカリキュラムが影響して

いることを知り怖くなった

- ・定期的な研修などで、保育者側の意識を考える必要があると思う
  - ・子どもへの声かけが、保育者のやりやすさではなく、子どものために言っていることなのか考えながら、責任を持つことの大切さを考えた
- 上記の意見を踏まえ、本講義をふりかえると、受講者は、グループ・ディスカッションを通して、保育現場における自身の追体験をしたことが理解できた。なお、受講者は、過去に人権教育や特別支援教育についても十分に学ぶ機会があった。そのような学生であるにもかかわらず、乳幼児がど

のようにして、アイデンティティ形成をしていくのか、ふさわしい態度を身に着けていくのかを理解していくプロセスは難しかったことが想像できた。また、ジェンダー意識に着目しがちな課題であるが、カテゴライズすることにより、それ以外の要素のほうが多いことも明らかになった。学生が悩みながら学ぶプロセスは、保育者養成課程での学びの蓄積となる。学び続ける際、自己理解をしながら事実に向き合うことが効果的であることが示唆される。

また、次のようなコメント（一部抜粋）は、保育の未来を変えていく保育者のリーダーシップを予測させるものである。

「何ごととも早く行動する、好き嫌いをしない、皆で仲良く遊ぶ、なんでも上手にこなす・・・このようなことが、偉い、良いこと、と保育者で共通認識されていることに課題を感じた。人は一人一人違うと言いながら、仲間外れや自己喪失感がうまれることもあると思った。自分の言葉や行動を子どもたちがどうとらえ、それが定着していくとどうなるのか、先を読み、責任をもってかかわっていくことは大変だ。けれど、とても大切なことだと思った。私もしっかり考えていきたい」

「私自身、幼いころから制服や皆と同じことをする、という集団生活の中の暗黙の了解が苦手だなじめないことが多かった。今回、グループ課題をしながら‘苦手であり、そうできなかった自分’をネガティブに見ている自分に気が付かされた。頭では、人はそれぞれ違うことが当たり前と考えることができて、かつてそうできなかった自分を責めていることは、隠れたカリキュラムが生んだ、よくない影響の一つだと考える。何十年も一人の人間の思考を左右する大きな問題であると知ることができて良かった」

「実習のときに、昼寝の時間に眠れない子がいた。保育者は寝かせようと躍起になっていたが、眠れないのには理由があるので（たとえば夜しっかり眠っている／体力がある／ドキドキしているなど）その時には、寝ることにこだわらず、静かに過ごす対応を見つけることも大切だと思う」

学生の中にある「隠れたカリキュラム」に目を向けることにより、保育者がおかれている実態と共に、自身の中に無意識にあるステレオタイプに

意識を向ける体験が可能となったと理解できる。今後、このような自身を振り返る学びを続けるためには、保育現場に出てしまえば、相当なエネルギーと、意識を持続させるための何らかのきっかけが不可欠であろう。保育者養成校は、卒業後を見据えた研修等の仕掛け作りも新しい課題になるだろう。

#### 4.1. フィンランドの保育実践から見えるもの

日本の保育者養成校の現状を踏まえ、2019年に、フィンランドで実施した合計6週間の現地調査の成果を振り返りたい。特に、2つの具体例をあげながら「隠れたカリキュラム」における論点を探りたい。

##### 1) 自分のことは自分で決める

調査時に、保育者が外に遊びに行こうと誘っても、室内で遊びたいという3歳児Aがいた。フィンランドではどんなに寒くてもマイナス15度までは、天気の良い日は外遊びをすることが推奨されている。しかし、そのとき保育者は、Aをアシスタントと一緒に室内に残したまま屋外に出た。屋外に出て、しばらくして戻ると、Aは同じ場所で先ほどと同じ玩具で遊んでいた。あとから保育者に話をきくと、Aは、フィンランドに来て間もない移民であり、家庭では小さいきょうだいもいるので、家庭では、一人でじっくり玩具で遊べる時間がないのではないかと話してくれた。そのため、無理やり外に連れ出すことはしなかったのである。そのうえで、「自分が今、どこで何をしたいかを伝えられることは、素晴らしいことだと思う」とAを高く評価していた。この事例を思い出すたびに「もしも日本の保育現場だったら、保育者はどのように促し、評価するだろうか」と想像がやまない。おそらく、天気がよい日に外で遊ぶことはもちろん、複数人で遊ぶことを推奨し、ましてや海外から来たばかりの子どもであれば「他の子どもと仲良く遊んでいるか」「周りには、いつ溶け込むのか」を心配する可能性が高い。フィンランドの保育者は「自己決定力」を重視するため、子どもであっても個人の決定は、大人の指示よりも大事にされることが多い。とくに保育現場では、幼少期から「自分のことは、自分で決める」という経験を積むことが最優先され



る。このロジックでは、自分で決めることをじっくり練習していくことにより、決めること（選ぶこと）を恐れない精神の基盤を作っていくことを目的としている。たとえば、今日、私が履く靴下は、長いのか短いのか。保育所では最初に誰に挨拶をするか（または、しないか）。給食の人参を、食べるか食べないか。これらは、大人が決めたりアドバイスをしたりするのはたやすいが、フィンランドの保育現場では、大事な権利保障のタイミングとして考えられるため、多くが助言はしない。玉置（1994）は、日本では、保育現場における人権というと、特殊なもので早すぎるものだと捉えがちであることを指摘し、効果的な人権教育というのは、意図しない瞬間に起こる事柄を心に留め、それを活用していくことだと述べている。「隠れたカリキュラム」が機能している瞬間は、日々の保育にある。日々の小さな積み重ねを見逃さないことは、重要な保育実践の一つだと示唆できる。

2）保育者もみんな違う

フィンランドの保育現場は、保育者の年齢層が厚い。多くの園では、20代から60代までの保育者が、現役の担任として働く様子がみられる。平均年齢は40歳代半ばであらうか。少なくとも、日本の保育現場のように、クラス担任のほとんどが、保護者より若いことは起こりえない。さらに、保育者は、日本の保育者よりはるかに自由な髪形やファッションをしている。ある園のクラスでは、担任3人がいずれも腕やクビに、文字や花の美しいタトゥーを入れていた。髪形や髪色は自由で、インタビューをした園長の一人は、緑色のメッシュを入れており「毎月髪の色を変える」と話してくれた。別の保育者は、赤く染めた髪色を嬉しそうに見せてくれた。ある保育者は、「私たちは、子どものモデルとなっている。子どもに自由に生きていいというメッセージを送っている」と話してくれた。このような話は、フィンランドの保育現場では頻繁に聞かれる。つまり、保育者が楽しく、ハッピーでいなければ、子どもはハッピーでないという発言である。日本の保育者現場の清潔感ある服装や髪形を否定するつもりはない。しかし、日本の保育現場の保育者は、日本生まれ日本育ちのアジア人で占められ、若く、はつらつと健康的であることがほとんどである。日本の子ども

が、保育者を見て憧れをもつとき、理想とするモデルが、より多様化する将来を想像している。さまざまな保育者のありかたが、多文化共生社会におけるモデルとなり、子どもの性や人種・民族、障がいへの態度に影響を及ぼす可能性があることを理解したい。つまり「隠れたカリキュラム」とは、既に、このような保育現場の様相の中に潜んでおり、気づかぬうちに周囲に影響を与えていることを理解しなければならないのである。

#### 4.2. 保育における「隠れたカリキュラム」の意義

保育の中の「隠れたカリキュラム」の研究は、そもそも保育におけるカリキュラム自体が教科教育とは異なり見えにくいことと関連し、発展途上であるといえる。また、量的に図られた研究成果が少なく、氏家（2009）の研究にみられるように、これまで教師と子どもの関係のみに焦点が当てられがちであった。しかし、その構造は、実はもっと複雑だと考えられる。つまり、子ども同士や家族関係、地域社会などの影響を受けて、社会の中の保育が成り立っているのである。保育現場の一部を切り取るのではなく、その文脈が社会全体とどのように絡み合っていくのかが丁寧に検討されていく必要性があげられる。それは、質的な分析を中心に、保育全体を理解する中で進められるべき研究であらう。

学生の一人は、講義終了後に「保育の中の『正しさ』とは何なのかわからなくなった」という感想を述べた。このように、日本の保育の日常をふりかえりながら、進むべき「正しい方向」とはなにか（果たしてあるのか）という疑問をもてる時間は「隠れたカリキュラム」を考察する意義そのものであると考えられる。

たとえば、鳥越（2014）は、園生活の中心である「遊び」の中でも、「隠れたカリキュラム」が存在しうると説明し、子どもの主体的な遊びを保障する保育の在り方について言及した。そこでは、保育における遊びは、保育者の望ましい / 望ましくないという恣意的な見方に左右されていること、そして、子どもの遊びの中での判断は完全に彼ら自身に任されているわけではないことを指摘している。この指摘からも明らかのように、保育者のコントロールが強い保育環境下では、おそら

く遊び以外の様々な生活や発達の道筋が、保育者の価値観で決定されてしまう危険性を含んでいると思われる。

漫画家の小栗左多里氏は、エッセイ(2021)の中で、異文化で育った夫婦の子育て観をユニークに綴っている。その中で、日本人のしつけに欠かせない「ちゃんとする」という言葉の威力について以下のように説明した。

そう考えると「ちゃんとしなさい」の「ちゃんと」ってすごい。「座って」とか「時間通りに」とか、「嘘つくな」「服直せ」果ては「働け」、時には「しゃべるな」と「しゃべって」、逆の意味にもなる。そのときどきで「こうすべき」という常識や規範が共有されているということだ。だからパッと見、日本社会は整っているように見える。

保育の目的は、日本社会の規範を守るための教育の先取りではない。また、子どもは、大人の所有物ではなく、大人と同等の権利をもつ人間である。保育者は、子どもの発達のプロセスを見守り、子どもの最善の利益を理解し、時には代弁者として共感しながら、主体的な一人一人であるための保育を実践しなければならない。したがって、保育現場の中で「正しく」「ちゃんと」保育することとはなにか、繰り返し考え、カリキュラムとリンクさせ、機能させることを期待したい。そのための「隠れたカリキュラム」の再考は必要である。

## 追記

本研究は、JSPS 科研費(21K02322)基盤研究(C)「フィンランドの保育における多文化共生の原理；学び・政策・まなざし」における研究成果の一部である。

## 引用文献

- 青野篤子(2008). 園のかくれたカリキュラムと保育者の意識. 福山大学人間文化学部紀要, 8, 19-34.
- 藤田由美子(2002). 子どものジェンダー形成におけるメディアと保護者の役割—幼児の保護者を対象とした調査結果の分析より—. 九州保健福祉大学研究紀要, 3, 267-275.
- 三井真紀(2016). フィンランドにおける多文化保育の研究 — 子育てをめぐるパラダイムシフト —. Visio, 46, 1-9.
- 三井真紀(2019). フィンランドの保育における共生の現状：幸福の国で親になる移民. Visio, 49, 51-57.
- 小栗左多里(2021). 子どものしつけはドイツ人に任せろは本当か？. (最終閲覧日：2021年12月10日, URL: <https://www.msn.com/ja-jp/lifestyle/lifestylegeneral>)
- Philip W. Jackson(1990). Life In Classrooms. Teachers College (Reprint), 33-34.
- 作野友美(2008). 2歳児はジェンダーをどのように学ぶのか — 保育園における性別カテゴリーによる集団統制に着目して —. 子ども社会研究, 14, 29-44.
- 鳥越ゆい子(2014). 幼稚園における『かくれたカリキュラム』の予備的考察 — 『幼稚園教育要領』の分析から —. 帝京科学大学紀要, 10, 101-108.
- 氏原陽子(2009). 隠れたカリキュラム概念の再考 — ジェンダー研究の視点から —. カリキュラム研究, 18, 17-30.
- (受稿：2021年12月17日, 受理：2022年2月25日)

## Deciphering Early Childhood Care and Education in Terms of Hidden Curriculum

Maki MITSUI

The purpose of the research is to understand the hidden curriculum of Early Childhood Care and Education. In the study, analyzed a problem through cases of Japan and Finland. It was revealed that expectation was related to a stereotype as for the result, curriculum of the childcare. Furthermore, as for the practice of the childcare, it is regarded as social structure and the sense of values of each country. In Japan in particular, a chance and an experience to lead to multicultural symbiosis might be spoiled. However, it turned out that it led to the possibility that it presented child care contents High quality to learn at teacher training stage.

**Key words:** Early Childhood Care and Education, Hidden Curriculum, Japan, Finland

